

友愛の現われであると思います。戦没した方々の御冥福を祈る日々であります。

海南島掃討戦

—海軍第十五警備隊—

愛知県 小栗浩嗣

私は大正六年八月十八日、現在の岐阜県瑞浪市、旧日吉村字田高所で生れたのですが、小学校六年の時、多治見市に転居。洋服縫製販売の修業をし、二十七歳によりやく独立したのもつかの間、昭和十七年に徴用で三菱電機に入り一か年、その間の昭和十八年六月一日、今度は召集令が来て、約一週間の後、呉海兵団に入団を命ぜられたのです。

応召ということで陸軍かと思っただけですが、その時期には海軍にも補充兵が入るようになったわけです。海兵団入団五日後、我々召集兵は身体検査などであわただしく過ぎ、その間に各方面に配属を命ぜられたの

です。

私は海南島方面と決定し、他の人々はそれぞれ各方面に分かれたのです。海南島は南支那の台湾ぐらゐの広さがある島で、昭和十四年陸軍が敵前上陸をして占領した所です。私の勤務地は「呉海兵団、佐世保局気付吉田隊」とのことで、正式には、海軍第十五警備隊・第一進撃隊・第一中隊第二小隊第二分隊でありました。任務は、海南島を占領していた陸軍の後をうけての掃討、治安維持です。

私たちは佐世保海兵団では教育は受けず、待機二日間、特務艦（輸送艦「室戸」）に、佐世保の兵隊と一緒に乗船したが、新兵の私には何人ぐらゐ乗ったか判らない。推定「四五百人ぐらゐ」とかという話もあったが、現地の軍属の兵舎を建てるというので、木材を積載していた。しかし、夏の酷しい暑さを感じたことは記憶にあります。

上陸したのは、島の南端の楡林という街で、その後四日程、新兵としての心構えを教えられた。今度は陸路トラックで輸送され、我々には初めて武器、衣糧、

その他の用具が支給をされた。それを持って砂質港という所へ行き、三か月の教育が始まった。

そこで、初めて軍隊の厳しさと、軍人としての心構えを植え付けられた。海軍は陸軍とは違い、その厳しさは話だけでは判らぬ、実際に経験しないと。教育は陸地だが艦船の上と同様で、安易な気持ちは許されず、艦船の上の精神を植え付ける。陸上勤務だが、艦上勤務教育と一緒に受けるのです。

教育地は港なので、泳げぬ者も泳がしてしまう。何しろ応召兵だから、とまどった兵隊もいたが、海軍魂を叩き込まれた。この教育は海軍でないと判らない。泳げぬ兵隊でも、船を出して甲板から飛び込ませ、往復させる。出来ない者はまた甲板に引き上げ、また海に叩き込み水泳を教えるわけだ。民間人の魂が抜けないと船へ着けないので、海軍魂を叩き込む。強くなるまでは何回でも叩き込まれる。

これによって船までたどり着ける兵隊となる。訓練は厳しい。これと同時に魂の抜け殻であつてはと、民間の気分が少しでも残っていると教育は完了しない。

この教育で民間の心を忘れさせるわけです。

次に、教育中に戦闘の実地訓練を含めて、比較的治安の良い所へ連れて行き、初歩的な残敵掃討である。その後、中隊別、地区毎に突き進んでいく。その頃になると我々初年兵も、戦闘が出来る心構・精神となる。

海南島は台湾と同じぐらいの面積だが、台湾南端より三百キロぐらい南が、海南島の北端で、中国の最南の島である。中国の罪人の流刑の地でもあり、多種多様な人種がいた。山間には苗族・黎人（持参の写真を示す）などもいました。

我々海軍警備隊は、いつてみれば陸戦隊で、島の治安維持をしながら残敵を掃討していたわけですが、敵は正規軍、警察、特警隊、共産軍などで、我軍にたち向かって来るのです。兵器は幼稚だったが、共産軍は独特戦法で山にたてこもり、夜間になると一般民間人の部落へ行き、村長を脅し、物資や武器を彼らのいる山の中へ運ばせた。日本軍の目を逃れて、山中の雨露をしのぐ仮小屋へだ、共産軍はそういう所で生活をし

ていた。

共産軍は他の敵より多かったと思うが、神出鬼没の戦法でした。服装は便衣で農民の姿をしているが、夜間になると戦闘員となる。彼等は日本軍の行動を畑の中で観察し、その状況を本隊に知らせ、日没と共に兵隊となるわけです。

我軍の目的とした討伐の相手は共産軍で、農民は日本軍が討伐に行くとは好意をもって、共産軍の情報を我軍に提供してくれた。それらの農民を良民化出来たのも、共産軍が逆に農民を苦めたり脅かしたりしたためです。我々は良民証を持たぬ者は敵性の共産系と見ていた。

農民の生活水準は低かった。一步山間部に入れば勿論電灯はなく、せいぜいランプか蠟燭だった。主食の米は硬質で、稲の丈も小さい。年二回の収穫だが収量は少ない。灌漑の方法も幼稚で、足踏み回転の水車ぐらいで、日本より技術は大部低かった。生活の収入源は黒豚や家鴨で貴重な家畜である。卵は暑さのため早く腐るためか、赤土と岩塩をこねた所に入れ、時々取

り出しては市場に売りに出していた（中国料理のピータン・アータン）。

これら住民の生活の中に我々の掃討の戦闘があった。海南島は山の中では、木の枝から茎が延びて出て、ジャングルのようだし、露出した岩肌が多くて行動が困難。敵はそこにひそんで、道の途中に二メートルぐらいの高さに石を積み上げその中側において、歩哨が銃口を向けて守っている。そこを乗り越え突破する時、狙撃され犠牲者が出ることも多かった。

そのため、擲弾筒を撃ち込むと、くもの子を散らすように逃げ、突っ込むと人間の姿はもう見えない。そこで敵の残した手製の手榴弾を回収する。しかし、安易な攻撃をすると思わぬ反撃を受けて犠牲者を出すことが多い。

共産軍は夜間行動をする。婦人などが物を天秤に担いで行動するので、我々はそこを狙う。そのため我々の討伐は日暮に進攻し、敵の移動時を予想し、山の両側に潜伏する。あるいは夜明に襲撃するのだが、敵は逃げ戦死者のみが残されていることもある。我々の服

装も便衣で中国人に化ける、敵の目をくらすため、隊長以下便衣で、大体一個小隊単位で行く。兩軍共にゲリラ戦、こちらも敵も同様だった。

柴中隊長は戦闘方法に秀でた人でした。その指揮下での討伐で、一週間に一度ぐらい出動したが、一か月に一週間は海口という都市で休養させた。これが我々兵隊にとっては唯一の楽しみ、その時は食事も優遇された。しかし、他の四週間は厳しい掃討戦の連続でした。灼熱の太陽の下、地面に足がつかぬ程熱い。軍靴でなく地下足袋だったので、スコールの時、溜った水に足袋をつけて歩いた。海南島は内地では考えられない地形だし、気候でした。

数ある戦闘の中で苦しかったのは高い山（寿万山）での戦でした。この岩山に敵が陣地を構えているので、そこを攻撃した。我が兵力は二個小隊ぐらいで、歩兵砲、重機関銃、擲弾筒を装備しての戦闘だったが、第四分隊だけが孤立してしまつた。他の部隊は討伐が終了したので下山していた。我が隊は急遽救援のため出發した。分隊は敵に包囲され、岩山の中の洞窟に立て

こもって応戦していたのをようやく救出することが出来た。同じ小隊の分隊で戦友もその中にいた。幸いにも犠牲者（戦死者）がなく、その時の状況は今でも思い出されます。

このように、私たちは終戦まで毎日の討伐戦で、終戦は山の中で聞き「本隊に復帰すべし」の命令が下つた。その前に、終戦近しとの状況が薄々判っていた（海軍は比較的情報を早く知ることが出来たらしい）ので、体を大切にしろと指示があり、食糧等は洞窟に入れて待機していたわけです。

終戦を知ると、韓国の応召兵は隊列を組み、アッと一瞬間に海口の兵舎から出ていってしまった。しかし、日韓人の軋轢は無かつたようだが、彼等は民間人の所へ集結したのか、帰国したのか、その後の状況を私は知らなかつた。

終戦後は京山市という所に集結し、我々海軍陸戦隊はそこで中国蔣介石直系系軍によって武装解除された。武器・弾薬はもとより、私物一切、時計一個も取り上げられた。我々は整列をし、その前に所持品全部を置

かされ、身体検査もされた。検査する中国兵の姿も貧弱で、わらじ履き、「皇軍もこんな兵隊に負けたのか」と残念に思われ仕方なかった。

京山で抑留されたが、支給される食糧は米を湯吞茶碗一杯だけ、それを我々分隊十二、三人の物を皆で集め、釜に黒砂糖（片糖）を一緒に入れお粥として常食としていた。砂糖は現地人と鉄条網越しに、衣料などと交換して手に入れるのだが、私物は検査の時、中国軍に取り上げられているので、持ち物といっても着ている被服だけだ。段々と脱いでいくので復員の時は、本当に着のみ着のままの人が多かった。

復員船は、米軍の上陸用船舶のリバティーだったが、海の状況が悪く、七日間の予定が九日間かかり、昭和二十一年四月七日、和歌山県の田辺港に入港した。上陸したらDDTを頭から、また衣服の中へもかけられ消毒し、一泊して列車で岐阜へ帰った。

岐阜駅で降りたら一面の焼野原で、家がほとんど無い。胸を締め付けられる思いだった。この気持ちは終生忘れることが出来なかった。これは誰も同じ気持ち

だったと思います。私の家は幸いに焼け残っていたが、駅前には七、八十％焼けてしまった、なんという悲惨なことだ。戦争のみじめさ、人間の神経をどんなに痛めたか、今こうして生きている幸せを思うにつけ、死んだ人のご家族の気持ちは察するに余りあるものがあります。私の家族は田舎にいたので皆元気で幸いでした。

【解 説】

第十五警備隊Ⅱ昭和十六年七月三十一日、第十五防備隊を改編、爾後南支方面で行動していた。

海軍警備隊Ⅱ鎮守府・警備府または艦隊に属し、その所管轄地区内の防衛と警備に任じ必要に応じ港務・通信などの業務を分業する陸上部隊をいう。その所在地または番号を冠称し所要の艦船・防空隊・特設艦船などを付属させていた。

特務艦「室戸」Ⅱ大正七年十二月七日、三菱造船神戸で竣工、六千百三十トン、一二・五ノット、八センチ高角砲二門。

昭和七年、上海事変で特務艦のまま、病院船の

施設に整い戦場に向かった。昭和十九年十月二十
二日、奄美大島北方トカラ列島東部海面で潜水艦
の雷撃を受け沈没。

―船 団 護 衛―

海防艦戦務一筋

山口県 末 宗 勲

大正十五年五月二十六日、現在の山口市仁保上郷で
生まれました。男六人、女五人の兄弟の五男とし、農
業と土建業を営む父母に育てられました。当時の日本
の国情からして、徴兵を待たないで海軍に志願し、昭
和十八年四月二十日大竹海兵団に入団しました。

海兵団の訓練は当然厳しかったが、皆新兵でしたの
で水兵としては、銃剣術などの戦闘基礎教練など一般
的な教育は約三か月で、内務では精神注入棒で叩かれ
たのは当然でした。

水兵として、敷設艦（機雷を海へ落していく）「サイ

ゴン丸」に乗り組みを命ぜられた。私が乗った時は豊
後水道、紀伊水道あたりの勤務で、艦長以下二百人近
い兵員でした。そこで敷設する機雷の構造などを教え
られ、触角を付けたりしましたが、機雷は一かかえ以
上の球形で、周囲に触角があり、これに艦船が触れて
爆発し沈没させる。丸い機雷の下に台があり、その下
に目計りをつけたワイヤーが付けてある。水深に応じ
ワイヤーの長さを決め水底へ落す。機雷は海底に落ち
た台とワイヤーで繋がれ、海面より見えぬ程度の所に
浮遊する仕掛けになっています。

敷設艦は潜水艦を防ぐため、航行しながら三十秒お
きぐらいごとに海に投げ入れる。この頃は日本近海を
主として行動したが、根拠とする港は敷設場所によっ
て異なるが、ほとんど呉か佐世保の軍港だったと記憶
しています。

その後、横須賀対潜学校に入校、機雷より爆雷の組
み立てとか、針管を差し込んだりの作業の教育を受け
た。爆雷は二百キロぐらいの重さ、百リットルドラム
缶ぐらいの大きさです。両艦側から射出し、後部（艦